「近づけたいね、暮らしと政治」をスローガンに、1990年に地域の女性たちが中心となり設立した市民の政治団体です。

江戸川・生活者ネットワーク

それゆけ！レポート Vol. 127 2023.6.20

〒132-0033 江戸川区東小松川3-35-13-205／発行人：藤居 阿紀子／連絡先：☎03-5607-5975

めざすは 市民が自治するまちづくり！

2023年1月、江戸川・生活者ネットワークは「伊藤ひとみ」と「本西みつえ」の3期目の擁立を決定し、4月の江戸川区議会議員選挙に臨んだ結果、ふたり当選することができました。今回の統一地方選で「生活者ネットワーク」として東京全体では32人が当選、現在、都議会議員1名を含む40人の女性議員がそれぞれの地域で活躍しています。

生活者ネットワークの議席は「市民の議席」「大事なことは市民が決める！」、このことは江戸川ネットが設立以来めざしてきたことであり、揺るぎない姿勢です。

今後も生活者ネットワークの存在意義を確認しながら、地域に根差した活動をつづけていきます。

江戸川区の政治状況

今年の江戸川区議会議員選挙の投票率は42.25％、東京都全体が44.98％である中で相変わらず低い結果となりました。住民に最も身近な議会の選挙がこのような状況にあることは残念なことです。まだ、政治が市民にとって遠いもの、特別なものということなのでしょうか。江戸川区議会議員定数44人のところ候補者数は56人。圧倒的多数で区長与党と名乗る自民党、公明党に対し、新たに国民民主党、参政党、れいわ新選組を加え、共産党、日本維新の会、立憲民主党などの国政政党の候補者が多く、その中で新人が19人、女性が18人という状況でした。

選挙結果は、前期まで第1党であった自民党は現職3人を含む5人が落選した一方、前回の統一地方選では江戸川区で候補者を出していなかった4つの政党の新人候補が当選しました。また、女性の当選者は16人、区議会の女性議員の割合は36％になりました。女性の視点を大切に生活のルールをつくる、あるいは見直していくことで地域社会を豊かにしていきたいものです。

変わってきた選挙のアピール

選挙までの準備としてポスターや政策チラシ、駅頭遊説や政策宣伝カーによる外でのアピール活動、メルマガやホームページの活用などがありますが、今はさまざまなSNSで、候補者本人の人柄や日常生活のことを知らせ、身近な存在としてアピールする人も増えてきました。ツィッターを活用して選挙中の行動を流したり、駅頭遊説についても候補者が一方的に訴える形ではなく通りゆく人に話しかけたり、会話形式で政策について語るなど、候補者と有権者の距離間を縮める手法が取り入れられていました。

候補者の服装も以前のようなスーツスタイルではなく、応援者と同じウインドブレーカーを着てスニーカーを履くなど、ほとんどの人がこうしたスタイルで選挙に取り組んでいることも印象的です。

しかし、身近に感じる選挙スタイルになったことで、政治が市民にとって身近なものになったとは言えません。政治をお任せにするのではなく、投票した人もしなかった人も、議員の活動をチェックしていくことが重要です。

政治を身近なものに

市民にとって政治を身近なものにするためには、議員が身近な存在であるとともに、掲げる政策が生活やその地域の課題に沿ったものであることが大事です。また、政策づくりの過程や実現に向けた活動を市民とともに行っていくことで、さらに政治が身近なものになると考えます。

生活者ネットワークの活動は、まさにこうしたことを実践するための市民の受け皿として生まれたものであり、東京都内34自治体、全国8都道県で45年以上も実践してきました。

江戸川ネットは、地域の人たちとともに政策づくりを行い、議会質問につなげる「政策ゼミ」という講座を行っています。最近行ったゼミのテーマは『リサイクル』で、「レジ袋」「マイクロプラスチック問題」「プラスチックごみ」「食品ロス」の4つの小テーマを設定して、現在の身近な社会問題、江戸川区におけるその対策について、グループでの現場視察なども含め掘り下げました。そこから話し合いを重ねて議会の質問づくりを行い、実際に江戸川区議会での一般質問につなげました。参加した人たちからは、初めて議場に入った、議会を傍聴したことで少しは身近なものになった、という感想が寄せられました。

初心に返って「生活者の政治」を実践

「生活者」という言葉が政治の中で当たり前に使われるようになってきましたが、生活者ネットワークが発足した当初は「政治を甘く見るな」「ばかにするな」という批判が返ってくるほど、センセーショナルな言葉でした。これは、政治が生活者と結びついていなかったということの証左です。しかし、言葉としては登場しても、実際に生活者のための政治が行われているのでしょうか。

「市民の代理人」と称する生活者ネットの議員は、市民のボランティア活動に支えられ選挙を行い、一人が長く続けるのではなく交代制を実行。また、議員報酬はすべてを個人のものとせず市民活動の資金として使うことを実践しています。今回の選挙を終え、こうした現状について「心はアマチュア、仕事はプロ」としての独自性を評価するご意見も寄せていただきました。

他政党や無所属の議員との違いがここにあることを改めて多くの方々に伝え、市民が自治するまちづくりをさらにすすめていきます。

「甲状腺検診えどがわ」と「甲状腺検診かつしか」共催で
甲状腺検診＆ヨウ素剤配布を実施

2016年8月に江戸川区で市民の有志が立ち上げた「甲状腺検診えどがわ」には江戸川ネットの子ども部会のメンバーが参加しています。

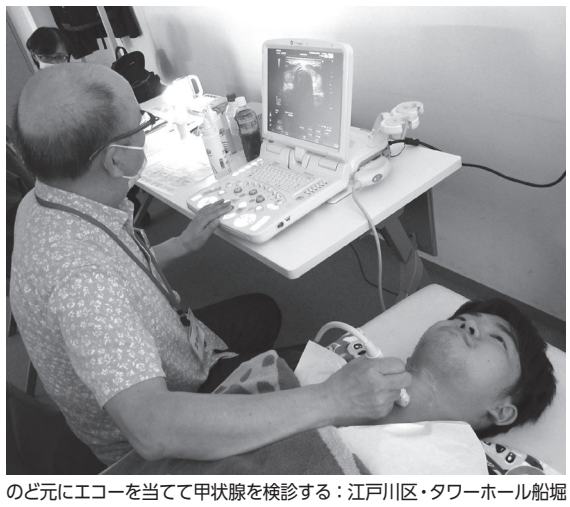
東京都内で初めての市民の手による検診が行われたのは2017年4月でした。その後2019年まで3回開催し、コロナ禍で中断を余儀なくされましたが、今年、再開することができました。

再開した甲状腺検診について共同代表西野陽子さんに寄稿をお願いしました。

新たな原発事故に備えて

「今こそ検診をやらなくちゃ」。一緒に活動した仲間に昨秋そう言われて正直びっくりしました。福島原発事故から12年、世の中はまるで事故などなかったように放射能影響が語られることが減っていたからです。新型コロナ禍の3年間を経て、人と接触せざるを得ない検診はもう難しいのではというのが率直な思いでした。でも仲間たちは本気でした。

昨年8月に岸田政権が原発再稼働の方針を打ち出し、いつまた事故が起こるかわからない事態に逆戻りしてしまったのです。増え続ける甲状腺がんの子ども（事故当時18歳以下）たちの早期発見という目的に、新たな原発事故に備えてという項目が加わってしまいました。ですから2020年4月に頓挫したヨウ素剤配布を併催することは、より今日的な意味を持つことになりました。


のど元にエコーを当てて甲状腺を検診する：江戸川区・タワーホール船堀

検診前に医師からの説明を受ける：江戸川区・タワーホール船堀

5月28日、江戸川区・タワーホール船堀で甲状腺検診えどがわとかつしかの共催により、検診とヨウ素剤配布を実施し、検診受診者は19人、ヨウ素剤受け取りは96人分でした。事前にメディアにプレスリリースを送り、東京新聞の社会面トップにカラーで掲載された効果は大きいものがありました。「1年に1回は受けたいと思っていたが市民検診はどこもなくなっていたので本当にありがたい」という保護者の感想や、小学生の子どもが「原発事故と甲状腺がんの子どもが増えていることの関係を認めないのはおかしい」といった意見を書いてくれたことは、やって良かったと思ったことでした。

当日、医師の説明や参加者からの情報提供でヨウ素剤服用の想定場面が増えました。①首都圏から近い東海第2原発の再稼働の事故時②福島原発1号機原子炉の圧力容器を支える鉄筋コンクリートの土台が損傷し圧力容器が倒壊する恐れから、また大量の放射能が放出される時。③ロシアがウクライナの原発を攻撃したように、日本の原発が攻撃される時です。③は現実味がまだありませんが、①は十分あり得ますし②は差し迫った危機です。私たちは一つひとつ事実をつかみながら、冷静に場面設定をしていく必要があります。何よりこうした事態を招かないように、再稼働を許さず、東電に情報開示と対応策を求め、戦争を起こさせないように行動していきたいと思います。

（甲状腺検診えどがわ 共同代表 西野 陽子）

●インフォメーション●

この夏、平和を考える活動をご一緒しませんか？
～区立滝野公園での2つのイベント～

江戸川区滝野公園にある「原爆犠牲者追悼碑」をご存じですか?1981年に「原爆の図」で有名な丸木伊里さん、俊さんが墨で直接描いた「平和の図」を200人もの区民がノミとハンマーで40日間かけて彫り上げたものです。被爆地以外の公立の公園にこのような碑が建てられているのは全国でも珍しいそうです。石碑に向かって手を合わせると広島、長崎の方向に向かうように建てられています。江戸川ネットも幹事団体として、このイベントに参加しています。

「江戸川区原爆犠牲者追悼式」

●7月16日（日）　14:00～
葛西区民館ホールにて式典。式典後、滝野公園の「原爆犠牲者追悼碑」に献花します。

「キャンドルデモ」

●8月9日（水）　18:00～
滝野公園にて集会後、西葛西駅近く「子供の広場」（通称 かいじゅう公園）まで、キャンドル型ライトを持ってデモ行進します。

お問い合わせ・連絡先：江戸川・生活者ネットワーク　TEL：03-5607-5975　FAX：03-5607-6158　Email：soreyuke@net.email.ne.jp

多様な性にYESの日

本西（もとにし） みつえ
江戸川区議会議員

1990年5月17日は世界保健機関（WHO）が同性愛を精神疾患のリストから外した日です。

江戸川区では「多様な性にYESの日」としてタワーホール船堀をレインボーカラーに点灯しました。江戸川さんしょうがいフォーラム（様々な障害を持つ人々の地域理解を促進するために2011年11月2日に設立した任意団体）では、その機会に合わせ、船堀駅北口でライブ＆トーク、マルシェを行いました。それぞれの色が集まってこそ美しく見える虹のように、多様性と触れ合うことでお互いの違いが、豊かさとして尊重し合える共生社会の実現をめざし、生きづらさを抱えながらも声を上げられない人に、仲間や支えてくれる人が沢山いるというメッセージを伝えました。

ともすると、男らしさ、女らしさが無意識の下に刷り込まれてしまいます。本区の中学校では、33校すべてが男女別名簿を使用していたため、江戸川ネットではその人らしさを大切にするよう、男女混合名簿とすることを提案してきました。現在では、すべての小中学校で混合名簿になっています。コロナが明け、久しぶりに入学式に参列したところ、男女の区別なく50音順で呼ばれていました。そして、新しい制服（江戸川区では標準服）というへと変わっており、女子がネクタイをしたり、パンツを着用する姿もありました。

定められたものからの選択をさらに進め、服装は自由でよいのではないでしょうか。一人一人が個性を生かし、違いを認めあえる社会に変えていくことが大事だと思います。

今こそ議会改革!!

伊藤（いとう） ひとみ
江戸川区議会議員

今回の選挙では、日本維新の会、れいわ新選組、国民民主、参政党といった国政政党が入り、議員定数44人のうち女性が5人増えて16人になりました。増えたとはいえ36％の比率は、決して高くはありませんが過去最高になりました。

また会派構成は、自民党12人、公明党12人、無所属の会5人、日本共産党、立憲民主・国民民主はそれぞれ4人、日本維新の会2人、無所属1人が2組（1人の場合は会派を名乗れない）となり、私たち生活者ネットワーク2人は、れいわ新選組の田村ひろしさんと「生活者ネットワーク・れいわ新選組」という会派を組みました。

7会派のうち自民党を除いて、幹事長がすべて女性になりました。交渉会派で構成する議会運営委員会理事会では、前期は女性が1人でしたので大きく変わりました。「女性が3人入れば、会議が変わる」と言われますから、議論が深まることが期待できます。ジェンダー平等の動きが高まる今日、女性議員超党派による提案などができれば、議会改革にもつながります。

議会改革として、これまで生活者ネットワークは「議案の分割付託」や「政務活動費のインターネット公開」などを提案してきました。今期もまずは、これらに取り組むべきだと考えます。

また、民主主義の根幹は、多数決ではなく議論を交わし結論を導くことですが、議会においては議論もなく、ほとんどが多数決で決まります。江戸川ネットは、これまで2議席を守ってきましたが、今後は議員を増やすことも視野に入れて活動していくことが必要です。

今回は、交渉会派には1人少ない3人会派ですが、一致する政策については調整しながら提案し、会派として得られた発言の機会を有効に使っていきます。

生活者ネットワークは
東京の地域政党です
40年の実績　市民が育てる東京・未来

最も身近な自治体議会に議員を送り、地域から生活の課題を解決していきます。現在34の自治体にそれぞれ生活者ネットワークがあり、**区・市議会議員40人、都議会議員1人**を擁しています。食品安全、医療、水問題など、東京全体の課題には「東京・生活者ネットワーク」として取り組んでいます。

江戸川・生活者ネットワークのルール

◆議員は交代制
議員を職業化・特権化せず、新人議員を送り出すことで政治参加の層を広げ、常に新しい視点や感性を活かした政治改革を実践します。交代後は、市民活動などにその経験を活かし、議員経験者を次々に生み出すことで、政治家まかせ、行政まかせにしない市民を増やす運動をすすめています。江戸川区ではこれまでに7人の女性議員を誕生させてきました。

◆議員報酬は市民の活動資金に
生活者ネットワークの議席は市民のためのもの。議員は、報酬から経費を引いた額を生活者ネットに寄付し、市民の活動資金にしています。お金の流れはすべて公開しています。

◆選挙はカンパとボランティアで
選挙では、候補者が費用負担することはなく、カンパとボランティアで行なっています。

● 活動にご賛同いただける方はカンパをお願いします。　ゆうちょ銀行　口座記号 00170-6　番号 763600　口座名 江戸川・生活者ネットワーク ●